

渡邊 裕一

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：後期：月・5 時限 試験時間割：2021/01/21 5 時限

--- 概要 ---

本講義では、様々な分野から講師を招き、それぞれの専門的な立場から「国際化と日本」に関する講義を行ってまいります。キーワードは「核兵器・原発」「東アジア」「新しい平和運動」です。いずれも重要かつ複雑なテーマですが、それぞれを「自分の問題」として捉え、多様な視点から掘り下げて考えることのできる能力を身につけて下さい。

まず核兵器・原発の歴史をおさえたうえで、最新の自然科学の成果にもとづいて核兵器の原理と作用・危険性について学びます。核兵器について考えるさい、「ヒロシマ・ナガサキ」の歴史的経験をどう捉えるべきかという重要な問題が私たちの前に立ちはだかります。「ヒロシマ・ナガサキ」の現時点における世界史的な意味を浮き彫りにするため、「記憶」の問題として実際の被爆者の「語り」に耳を傾け、それを「語り継ぐ」ことの重要性を考えてまいります。次に、これから東アジアと友好的な関係を作り上げていこうとする観点から、「被害者」の観点と同時に「加害者」としての観点をいれて日本の「過去」の問題を扱います。そのさい、日本の平和認識だけでは限界がありますので、グローバルな視野を培うために、ここでは韓国や中国など東アジアからの視点、さらにジェンダーの視点も加えて考察を深め、最後に憲法9条の問題と新しい平和運動について学びます。以上の講義全体を通じて、いま私たちが生きている「福岡」という地域がどのような位置を占めているのか、未来を見据えながら、過去、現在の日本の問題、そして福岡の問題を、グローバルとローカルの双方の視点から紐解いてみてください。

*実務経験がある教員について

本講義では、各分野で活躍され、実務経験を有する教員にも授業をご担当いただきます。第8、9回の富永桂子先生は、「久留米市男女平等政策審議会」委員や「『福岡市男女共同参画を推進する条例』をくらしに活かす市民の会」代表を務めており、その実務経験を踏まえ、戦時暴力と女性の問題について解説いただきます。第10回の後藤富和先生には、弁護士として自らが関わってこられた「中国人強制連行・強制労働事件」について講義いただきます。第13、14回の木村公一先生は、牧師としてイラク戦争時の「人間の盾」で主導的な役割を果たされた経験から、「新しい平和運動」の理念と実践について解説いただきます。

--- 到達目標 ---

「核兵器・原発」「東アジア」「新しい平和運動」について、歴史的な経緯を踏まえた客観的な知識を身につけ、その今日的な問題点や課題について正確に理解することができる。(知識・理解)

現在の日本社会でも多様な見解が存在する諸問題について、それぞれの歴史的な背景や経緯を踏まえ、論理的・客観的に思考することができるようになる。(技能)

グローバルおよびローカルの両視点から、「核兵器」や「平和」のありかたについて考えられるようになり、問題の解決や将来的な展望について自らの言葉で発信することができるようになる。(態度・志向性)

--- 授業時間外の学習(予習・復習) ---

日ごろからニュースや新聞に接し、問題意識をもって授業に臨んでください。予備知識や予習は特に必要ありませんが、毎回の授業後は、各自で内容の復習を行い(1時間弱)、授業の内容の正確な把握に努めてください。

--- 成績評価基準および方法 ---

定期試験により評価します。試験では、授業で扱った各テーマについて、今現在何が問題となっているかを正確に理解し、問いに対する答えを論理的・客観的な文章で説明できているか否かを評価の重要な基準とします。

--- テキスト ---

特になし。授業では適宜レジュメを配布します。

--- 履修上の留意点 ---

第1回目の授業で注意点を述べます。私語・飲食は厳禁です。欠席・遅刻に注意し、各講義のあとは復習を忘れないようにしてください。

--- 授業計画 ---

1. オリエンテーション(渡邊裕一・本学人文学部講師)
2. 核兵器と原発の歴史(渡邊裕一・本学人文学部講師)
3. 核兵器と原発の歴史(渡邊裕一・本学人文学部講師)
4. 自然科学から見た核兵器(大槻かおり・本学理学部助教)
5. 自然科学から見た核兵器(大槻かおり・本学理学部助教)
6. 語り継ぐ被爆体験(三根繁・本学人文学部非常勤講師)
7. 東アジアの歩み(山田良介・九州国際大学国際社会学科准教授)
8. 戦時暴力と女性たち(富永桂子・本学人文学部非常勤講師)
9. 戦時暴力と女性たち(富永桂子・本学人文学部非常勤講師)
10. 中国人強制連行問題(後藤富和・弁護士)
11. 憲法9条の現在(石村善治・本学法学部名誉教授)
12. 憲法9条の現在(石村善治・本学法学部名誉教授)
13. 新しい平和運動(木村公一牧師・本学人文学部非常勤講師)
14. 新しい平和運動(木村公一牧師・本学人文学部非常勤講師)
15. まとめ(渡邊裕一・本学人文学部講師)

辻部 大介、

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：後期：月・5 時限 試験時間割：2021/01/21 5 時限

- - - 概要 - - -

専門分野を異にする8名の教員が、おのおの1～2回の講義を担当し、地中海世界から北方ヨーロッパにおよぶ各地域に、また、歴史、政治、美術、建築、スポーツ、言語、文学、宗教といった諸分野にまたがる、ヨーロッパの社会や文化の諸相を、学生の知的欲求にうったえうるさまざまな個別的事例に基づいて講ずる。現代ヨーロッパのみならず、現代ヨーロッパを作りあげる基盤となった古代、中世、ルネサンスといった過去の時代の社会や文化についてもとりあげる。個々の事象の例示にあたっては、日本との比較・対照をうながし、日本の社会や文化の現状に対する問いかけを動機づける。初回と終回の授業では、統括責任者2名が、各講義の連関および授業全体の意義について受講者それぞれが考察をめぐらすための視点を提供する。なお、東原の担当回（第3・4回目）においては、在オーストリア日本大使館専門調査員としての実務経験によって得られた、現代オーストリアの諸政治勢力の動向等に関する調査結果を活用した講義が行われる。

- - - 到達目標 - - -

ヨーロッパ文化の多様な側面について知識を有している。(知識・理解)

自国とは異なる文化に対する興味と探究心を有している。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

授業時にとったノートを読み返し、授業内容の要点を頭の中で整理する。キーワードについては、自分の言葉で説明できるようにする(60分)。また、よりくわしく知りたい点を書き出し、インターネットや図書館で調べ、わかったことをノートしておく(120分)。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

平常点(毎回の授業の終わりに記し提出してもらうミニッツペーパーによる)30%、定期試験の成績70%の割合で評価する。試験問題および評価基準は、1)8名の講義担当者それぞれの講義内容をどれだけ理解し、具体的な事項をどれだけ知識として定着させたか、2)15回の講義内容全体をふまえて、現代のヨーロッパと日本との関連を内省するための観点をどれだけ獲得できたか、を問うものとする。

- - - テキスト - - -

使用しない。必要に応じて、各講義担当者がプリントを配布する。

- - - 授業計画 - - -

- 1 オリエンテーション(辻部・堺雅志)
- 2 ヨーロッパの成り立ち 中世まで(堺)
- 3 現代オーストリアの政治体制 成立と発展(東原正明)
- 4 現代オーストリアの政治体制 ナショナリズムの台頭(東原)
- 5 中世のゴシック建築 フランスの大聖堂を中心に(太記祐一)
- 6 建築文化のHUBとしての19～20世紀(太記)
- 7 美術遺産とイタリア(浦上雅司)
- 8 カトリック教会とイタリア(浦上)
- 9 ドイツの地域生活とスポーツ(藤井雅人)
- 10 スポーツ強国としてのドイツ(藤井)
- 11 バルカン半島の歴史 ビザンツ帝国を中心に(西村道也)
- 12 バルカン半島の歴史 オスマン帝国とユーゴスラビアを中心に(西村)
- 13 中央ヨーロッパ：言語、文字、宗教の交錯(富重純子)
- 14 フランスの旧植民地：アルジェリア(辻部)
- 15 講義のまとめと展望(辻部・堺)

三島 健司

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：後期：金・4時限 試験時間割：2021/01/21 5時限

- - - 概要 - - -

地域(ローカル)の特色や特性を考慮し、国際的(グローバル)に独自性を有して、すなわちグローバルに海外と付き合うグローバル化リテラシーを受講生が修得するために、グローバル化教育に精通した教員と地域特性・専門性・産学連携に精通した教員により、オムニバス形式で海外研修・留学の一助となるように実施する。教員の多くは、起業、経営、海外との交流などの多くの経験があり、実際に携わったそれらの経験を参考に講義します。受講する全学部の学生各自が、地域の歴史的、文化的、経済的、特徴的な素地を学び、将来、グローバルに活躍するための能力について学習する。講義の中では、グローバル化のために国際センターが実施している留学、英語プレゼンコンテストなどのイベントについても説明が行われる。

- - - 到達目標 - - -

海外での仕事、留学に必要な能力について説明できる。(知識・理解)

海外での仕事、留学に必要な基礎知識について説明できる。(知識・理解)

海外での仕事、留学に必要な手続きと制度について説明できる。(技能)

東アジア・東南アジアに関して、その特徴を自ら説明できる。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

講義に関するレポート課題も行うので、インターネットや資料を活用し、家庭での学習も計画的に行う。わからないことがあれば積極的に質問する。講義に臨むにあたっては、予めシラバスを参考に、予習しておくこと。(30分)
 また、講義終了後は、配布資料を熟読し、その日の重要ポイントを整理しておくこと。(60分)

- - - 成績評価基準および方法 - - -

評価は、定期試験を90%、各回の課題ならびレポートなどを10%として、評価する。

成績評価の基準としては、海外での仕事、留学に必要な能力・基礎知・手続きと制度・東アジア・東南アジアの特徴について自分の言葉で正確に説明できているかを評価の基準とする。また、レポートの課題について、十分なデータを集めたか、そのデータに基づいて自分の見解を明確に記述しているかを評価の基準とする。

- - - テキスト - - -

講義中に資料を配布する。

- - - 履修上の留意点 - - -

講義中に配布する資料は、各自がファイルに整理し、講義に必ず持参すること。

- - - 授業計画 - - -

まず、全体のガイダンスとスケジュール・評価方法について説明を行う。以下のスケジュールで実施する。

1. コンピュータリテラシーとグローバル化 担当：折居 英章
2. 東アジア・東南アジアと福岡の交流 担当：三島健司
海外での仕事、留学に必要な能力・基礎知識
3. 国際化に必要な能力 担当：高木健作
4. カンボジアと日本 担当：大谷賢二
5. 世界の商売 担当：小村富士夫
6. 世界に広がる福岡大学方式・環境技術 担当：松藤康司
7. 世界に広がる福岡大学方式・環境技術 担当：田中綾子
8. コミュニケーションツールとしての英語 担当：佐々木有紀
9. 中国と日本の科学技術 担当：孟 志奇
10. インターネットとグローバル化 担当：三角 真
11. 国際化と英語 担当：新田よしみ
海外出張などの実例、英語プレゼンコンテスト、福岡大学が実施している留学システムなどの説明
12. 感染症とグローバル化 担当：Tanjina Sharmin
13. 世界のビジネスモデル 担当：妹尾八郎
14. グローバル科学技術 担当：相田卓
15. 親日的な海外の国 担当：三島 健司

山本 俊浩、添田政司、柳橋泰生、武下俊宏、為田一雄、鹿子木公春、小田信介、田代武夫

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り

授業時間割：後期：水・5時限 試験時間割：2021/01/14 3時限

- - - 概要 - - -

産業革命以降、産業経済活動が高度化したことに加えて、大量生産・大量消費・大量廃棄型の経済活動が地球環境へ大きな負荷をかけ、地球温暖化だけではなく、資源の枯渇や廃棄物の処理処分に係わる環境汚染問題をも引き起こしている。このため、自然界における適正な物質循環に配慮した社会システムの構築と環境負荷を低減する施策が必要とされている。

本講義では、国及び地方における環境行政やエコタウン事業の現状、さらには各種資源のリサイクル、廃棄物処理問題の現状と課題等をそれぞれの専門的立場から講義担当者が分かりやすく解説する。

具体的な内容は以下のとおりである。

(1) 環境省で環境行政に従事していた教員がその経験を活かし、循環型社会の構築に向けた国（環境省）の取組みについて、地方における環境行政については(2) 元福岡市環境局職員による福岡市のごみ行政の歴史および現在の取組みとしてアジア地域への廃棄物分野の技術移転及び国際協力等について、(3) 現北九州市職員による北九州の環境行政を中心に環境政策の歴史や公害克服事例について解説を行う。また、各種資源のリサイクルに関しては(4) 製品の資源採取から廃棄までを総合的に評価し、環境への負荷を最小にしようとする試みの紹介と材料リサイクルの現状と課題、さらに各種リサイクル法について、特に、(5) 産業廃棄物の約2割は建設工事に伴い発生した「建設副産物」であり、これは建設リサイクル法等によってリサイクルが義務付けられている、そのリサイクルの現状と課題について、(6) 自治体から使用済みペットボトルを引き取り、数段階の工程で再処理を行い、クリーンなPET樹脂を製造している立場から、「容器包装リサイクル法」に基づいたペットボトルのリサイクルの現状と問題点について解説する。さらに、(7) 環境コンサルタントで研究開発に従事していた教員が廃棄物処理処分に関する計画設計および事業化等の実務経験を活かし、わが国の廃棄物処理の歴史、資源化・処理・処分・リサイクル・不法投棄・災害廃棄物処理処分等の現状と諸外国との比較、さらに循環型社会を構築するために必要なこれからの廃棄物処理処分のあり方について(8) エコタウン事業を推進する北九州市に進出した本学資源循環・環境制御システム研究所（資環研）の研究開発室長による環境問題への取組みについて、解説を行う。

- - - 到達目標 - - -

国および地方自治体の環境に対する取組みについて説明できる。(知識・理解)

各種資源のリサイクルの現状と課題について説明できる。(知識・理解)

廃棄物処理問題の現状と課題について説明できる。(知識・理解)

環境行政、各種資源のリサイクルや廃棄物処理問題のこれまでの解決事例等を学び、新たに直面する課題に対して自分の考えが展開できる。(技能)

環境問題について、テレビ、インターネット、新聞、雑誌等で接する情報を踏まえて日常的に考えるようになる。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

講義の内容を理解するために、環境省のホームページにある環境白書を事前に読んでおくこと。(60分)

授業の最後に小テストを実施するので理解できなかったところを復習しておくこと。特に、各自、小テストの模範解答を当日の講義資料やノートおよび関係する参考資料をもとに作成すること。さらに、模範解答をつくる際、これに関連する項目についても理解しておくことが望ましい。(90分)

- - - 成績評価基準および方法 - - -

到達目標が達成できているかを確認するため、国および地方自治体の環境に対する取組みや各種資源のリサイクル、廃棄物処理問題の現状と課題についての基礎知識が得られているかを総合的に評価する。

配分は以下の通りである。

小テスト 20%：各担当が講義の最後に行う小テスト

中間試験 30%

定期試験 50%

- - - テキスト - - -

特に定めない。なお、担当者がプリントを作成し配布することもある。

- - - 参考書 - - -

各担当者が、各自の担当範囲で適宜紹介する。

- - - 履修上の留意点 - - -

この講義は、資源循環と地球環境問題についての基本的な考え方及び実務者の立場からみた現状と課題について理解することを目的としている。現代社会の課題等を勉強することを目的に受講する場合は問題ないが、卒業単位を得るために受講する場合は、定期試験の結果のみで評価せず、毎回の授業で実施する小テストや中間試験の成績が重要になるため、就職活動等で欠席が多い場合は単位取得は困難と思われる。この点を考慮して履修登録してください。

- - - 授業計画 - - -

- 1 「資源循環と地球環境」の授業構成
(担当) 山本 俊浩(工学部)
- 2 ペットボトルのリサイクルの現状と問題点
(担当) 鹿子木 公春
(西日本ペットボトルリサイクル(株))
- 3 建設副産物におけるリサイクルの現状と課題(1)
(担当) 添田 政司(工学部)
- 4 建設副産物におけるリサイクルの現状と課題(2)
(担当) 添田 政司(工学部)
- 5 材料リサイクルの現状と課題(1)
(担当) 山本 俊浩(工学部)
- 6 福岡市のごみ行政の現状と課題
(担当) 田代 武夫(元福岡市環境局)
- 7 北九州市の環境行政
(担当) 小田 信介(北九州市役所)
- 8 中間評価
(担当) 添田 政司(工学部)
- 9 廃棄物処理問題の現状と課題(1)
(担当) 為田 一雄(工学部)
- 10 循環型社会の構築に向けた我が国の取組み(1)
(担当) 柳橋 泰生(工学部)
- 11 循環型社会の構築に向けた我が国の取組み(2)
(担当) 柳橋 泰生(工学部)
- 12 廃棄物処理問題の現状と課題(2)
(担当) 為田 一雄(工学部)
- 13 材料リサイクルの現状と課題(2)
(担当) 山本 俊浩(工学部)
- 14 北九州エコタウンにある本学資環研の環境問題への取組み
(担当) 武下 俊宏(工学部)
- 15 授業評価など
(担当) 山本 俊浩(工学部)

青木 文夫、岡住 正秀、椎名 浩、畠中 昌教

期別：前期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：無し 科目水準：入門 試験実施：有り
授業時間割：前期：水・4時限 試験時間割：2020/07/22 3時限

- - - 概要 - - -

スペイン語を学ぶものにとっても、そうではないものにとっても、EUの主要な国であるスペインの社会と文化の概要は、スペイン語が中南米の多くの国の言葉でもあることから、世界情勢を理解するうえでも重要な知識となるだろう。その入門的な科目として、複数の講師による輪講形式授業で、スペインを中心とした地中海文化圏に関する基礎知識を学ぶことを目標にします。

- - - 到達目標 - - -

EUの中でのスペインの国勢を理解する(知識・理解)

スペインを中心とする南欧の様子を理解する(知識・理解)

スペインの歴史を概観できるようにする(知識・理解)

スペインの地方自治の例から、言語文化に対する考えを形成できるようにする(技能)

日・西文化の懸け橋となるようにする(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

受講者にとって新しい知識が多いと思うので、各担当者の講義内容から、キーワードをきちんと理解できるように、その要点を講義の後にまとめておくことと復習が大切です（学習時間は約30分を見込みます）。試験問題もそこからの出題となります。（例：シェンゲン条約とは何か？といった初めて聞く言葉の意味をきちんと理解できるようにする）またFUポータル上の授業管理から授業の進行に関する情報を送信するので、週に1度は開いて確認するように。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

上記で述べたように授業中に説明したキーワードを中心とした論述問題を作成します。定期試験において各担当者が出題する記述式の問題の中から2名の担当者の各1問ずつを選択（計2問）して回答するが、次の条件を理解して回答すること。答えはそれぞれの担当者が、授業時に配布回収したミニッツペーパー（簡単なコメントや意見他を書かせるペーパー）の評価も加点しながら50点満点で採点し、その合計の評価をそのまま成績とする。また、ミニッツペーパーの加点の配分はトータルで40%とし、かなり重視するので、試験の際はミニッツペーパーを提出していない担当者の問題を回答した場合は、不利になると思って下さい。なお、ミニッツペーパーは原則すべての授業の際に回収しますので、きちんと出席して対応するようにして下さい。その意味で就職活動や課外活動で欠席が多く見込まれる学生の受講はお勧めしません。

- - - テキスト - - -

なし：各担当者より講義資料をプリントで配布するか、授業管理で送信する。

- - - 参考書 - - -

図説スペインの歴史（川成洋、中西省三編：河出書房新社）

スペインの歴史（立石、関、中川、中塚著：昭和堂）

スペイン（増田監修：新潮社）

スペインの社会（寿里、原編：早稲田大学出版）

スペインの政治（川成、奥島編：早稲田大学出版）

スペインの経済（戸門、原編：早稲田大学出版）

講義の際にも各講師より随時紹介する。

- - - 履修上の留意点 - - -

スペイン語を履修していなくても理解できます。

担当責任者の青木のオフィスアワー（文系センター8階）

月曜昼休み12時10分から12時50分まで

火曜昼休み12時10分から12時50分まで

水曜も可能ですが、メールで空いている時間を問い合わせして下さい。

事前に予約なら確実です。留学、学習その他なんでも相談OKです！

メール：faoki@fukuoka-u.ac.jp

- - - 授業計画 - - -

第1回 青木

講義全体の概要と、スペインの国勢の概略。

第2回～第5回 岡住

（講義サブタイトル：スペインのイメージを歴史から学ぶ）

第6回～第9回 畠中

（講義サブタイトル：スペインの観光地理学入門：ワインと美食のスペイン）

第10回～第13回 椎名

（講義サブタイトル：高校教科書に登場する「スペイン」）

第14回～第15回 青木

（講義サブタイトル：スペイン語から学ぶ言語文化と言語教育の将来）

詳細な講義概要は添付ファイルを参照して下さい。

- - - 添付ファイル - - -

講義概要

(S00000960505文化と教育前期講義概要2020.docx)

青木 文夫、辻博子、野村明衣、フジヨシミヨコ

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：無し 科目水準：入門 試験実施：有り
授業時間割：後期：水・4時限 試験時間割：2021/01/14 3時限

- - - 概要 - - -

中南米諸国にはスペイン語圏の国が19あり、スペインを含め約4億5千万人以上がスペイン語でコミュニケーションをしています。この広大な文化圏を理解することは、世界情勢の理解に欠かせない重要な知識となります。日本にも日系人を含む中南米の人たちが多く訪れ、また実際に生活をしています。彼らの心を理解するためにも、この科目で基礎的な中南米の現状を把握して、国際人としての基礎知識としてイスパノアメリカの概要を学ぶのを目標とします。

- - - 到達目標 - - -

中南米国家の独立の様子を理解する(知識・理解)

イスパノアメリカという概念を理解する(知識・理解)

メキシコやキューバといった未知の国の様子を理解する(知識・理解)

言語文化論のきっかけとなる議論ができるようにする(技能)

言語教育論の入り口となる議論ができるようにする(技能)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

受講者にとって新しい知識が多いと思うので、各担当者の講義内容から、キーワードをきちんと理解できるように、その要点を講義の後にまとめておく復習が大切です（所要時間30分を想定しています）。試験問題もそこからの出題となります。（例：イスパノアメリカとイペロアメリカの違いとは何かといった初めて聞く言葉の意味をきちんと理解できるようにする）またFUポータル上の授業管理から授業の進行に関する情報を送信するので、週に1度は開いて確認するように。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

上記で述べたように授業中に説明したキーワードを中心とした論述問題を作成します。定期試験において各担当者が出題する記述式の問題の中から2名の担当者の各1問ずつを選択（計2問）して回答するが、次の条件を理解して回答すること。答えはそれぞれの担当者が、授業時に配布回収したミニッツペーパー（簡単なコメントや意見他を書かせるペーパー）の評価も加点しながら50点満点で採点し、その合計の評価をそのまま成績とする。また、ミニッツペーパーの加点の配分はトータルで40%とし、かなり重視するので、試験の際はミニッツペーパーを提出していない担当者の問題を回答した場合は、不利になると思って下さい。なお、ミニッツペーパーは原則すべての授業の際に回収しますので、きちんと出席して対応するようにして下さい。その意味で就職活動や課外活動で欠席が多く見込まれる学生の受講はお勧めしません。

- - - テキスト - - -

なし：各担当者より講義資料をプリントで配布するか、授業管理で送信します。

- - - 参考書 - - -

概説ラテンアメリカ史（国本著：新評論）

上記を先ず読まれることを奨める。

その他は各担当者から講義の際に随時紹介する。

- - - 履修上の留意点 - - -

スペイン語を履修していなくても理解できます。

担当責任者の青木のオフィスアワー（文系センター8階）

月曜昼休み12時10分から12時50分まで

火曜昼休み12時10分から12時50分まで

水曜も可能ですが、メールで空いている時間を問い合わせして下さい。

事前に予約なら確実です。留学、学習その他なんでも相談OKです！

メール：faoki@fukuoka-u.ac.jp

- - - 授業計画 - - -

第1回 青木 イスパノアメリカの概要

第2回～第5回 辻
ペルーを中心とした、イスパノアメリカ征服と独立の歴史第6回～第9回 フジヨシ
メキシコの教育、文化、社会について第10回～第13回 野村
キューバとはどんな国だろう。第14回～第15回 青木
言語と教育をめぐる：プエルトリコの例など

詳細な講義概要は添付ファイルを参照して下さい。

- - - 添付ファイル - - -

講義概要

(S00000960501文化と教育後期講義概要2020.docx)

植上 一希、伊藤亜希子、ゴツィック・マーレン、添田祥史、藤田由美子、桧垣伸次、本多康生

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：無し 科目水準：入門 試験実施：有り
授業時間割：後期：火・2時限 試験時間割：2021/01/21 5時限

- - - 概要 - - -

- - - テキスト - - -

現代社会には多様な形で抑圧・差別が存在している。
「現代を生きる」者にとって、この抑圧・差別の存在を認識し、その克服を図っていくことは非常に重要な課題となる。そしてその際には、多様な抑圧・差別の連関や矛盾を総体的に把握する必要がある。

伊藤亜希子・植上一希編著『日常世界の「フツー」を問い直す 差別・抑圧をひもとく』（法律文化社）2018年。

- - - 履修上の留意点 - - -

そうした問題意識から、この授業では現代社会に存在する格差・抑圧・差別について、主に以下のテーマに分けて検討していく。

私語・飲食は厳禁。
遅刻、途中退室、居眠りなど、授業を妨げる行為については、成績評価において大幅なマイナス対象とする。

- - - 授業計画 - - -

1. 抑圧・差別とは何か
2. 性と抑圧・差別
3. 人種・民族等と抑圧・差別
4. 世代と抑圧・差別
5. 病と抑圧・差別
6. 抑圧・差別を連関してとらえ克服するために必要な観点

- 1.オリエンテーション～差別・抑圧について学ぶ：植上・伊藤
- 2.「フツー」を問い直すということ：植上・伊藤
- 3.現代日本の若者の抑圧：植上
- 4.学びからの排除問題とその保障：添田
- 5.ジェンダーと教育：藤田
- 6.ジェンダーと教育：藤田
- 7.ハンセン病問題：本多
- 8.中間まとめ：植上・伊藤
- 9.高齢者の居住問題：ゴツィック
- 10.外国人の権利：桧垣
- 11.ヘイトスピーチ：桧垣
- 12.日本の中の多文化：伊藤
- 13.異文化をどう理解するか：伊藤
- 14.現代日本の若者の抑圧：植上
- 15.まとめ：植上・伊藤

- - - 到達目標 - - -

現代社会における抑圧・差別の現状と課題について、一定程度の理解をする。(知識・理解)

諸テーマに通貫する問題性について理解し、説明することができる。(技能)

諸問題を乗り越えるための方策について、自分の考えを一定程度論じることができる。(技能)

諸テーマの連関を把握し、抑圧・差別を克服するための観点を獲得する。(知識・理解)

複数の教員の授業を通して、テーマに関する複眼的な志向性を獲得する。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

オムニバス形式なので、回ごとの担当教員の業績等に関してチェックしておくこと。テキストなどの予習をすることが望ましい。また、授業でしっかりとノートを取り、復習を行うこと。各回の関係性を意識して全体的なテーマの把握、分析を行うこと（毎回の授業ごとに予習・復習で1時間半程度が目安）。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

授業で説明した理論やキーワードについて理解し、かつ、それらを用いて自身の考えを明確に記述しているかを、評価の基準とする。

定期試験で評価を行う（9割）。
なお、授業における積極的な参加（発言、ミニッツペーパー）等も評価に加算する（1割）。

寺田 貢、須長 一幸、廣嶋 道子、紺田 広明

期別：前期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義及び演習 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：無し
 授業時間割：前期：水・5時限 試験時間割：定期試験なし

概要

この科目では、従来型の講義形式ではなく、体験型学習（PBL：Project Based Learning）を通して、自分で考え自分で行動するという「主体性」を自覚しながら、社会人としての活動を体験することを目的としている。

はじめに、グループのメンバーとチームとして活動するための基礎について学ぶ。これに続けて、日常の多くの時間を過ごすキャンパスを内に存在する問題点を個人またはグループで発見する。その問題点の解決・改善策を模索することから福岡大学が現在直面している課題の解決に挑戦する。

この科目の趣旨に賛同して下さった学内の関係部署の職員の方々に協力していただき、個人またはグループで切り出した問題（グループテーマ）について、グループでの調査やディスカッションを重ね、まとめ上げた提案を該当する部署の担当者にプレゼンテーションし、それに対する評価を受ける。これは、学内の担当者と受講者が、上司と部下の関係となるロールプレイ学習に対応する。

さらに、グループでチームとして活動することから、メンバー各人の個性を意識し、他者の考え方が多様であることを理解し、そのような多様性をもつメンバーとともに協働することを体験し、「多様性」の意味を理解し、「協働性」を身に付ける。

講義時間のほとんどを使って、グループテーマに対する解決・改善策や企画案を作成し、プレゼンテーションを行うことで、「正解のない課題」を解決しようとするプロセスと失敗を経験することから、社会に必要な力と現時点での自分の力とのギャップを自覚し、大学で学ぶ意義を再確認する。これに加え、自ら考え、自ら学ぶことの重要性を認識し、今後の大学生活を送る目的を明確にする。

上記の通り、福岡大学という現実の組織からご協力いただく職員の方々に、課題に関するヒアリングと評価をお願いしている。これに加え、講義担当者の寺田は、複数の企業において各種の装置開発に従事し、企業における実務的な経験を持ち、講義担当者の廣嶋は、民間において組織マネジメント業務に従事し管理者としての経験を持ち、これらの実務経験に基づいた知見により構成した実社会で求められる能力の養成に向けた内容の講義を実施する。

到達目標

- (ア) 社会に触れ、社会の実際の特徴や課題が何か説明できる(知識・理解)
- (イ) 社会の課題を解決する上で必要な力を知り、それらを実際に活用することができる(技能)
- (ウ) 大学生活を送る上で必要な取り組みについて説明できる(態度・志向性)

授業時間外の学習(予習・復習)

授業の進行に伴い、以下の事項について、事前・事後の学習が必要である。

- 1)学習前の自己評価である事前アンケートへの回答（60～90分程度）
- 2)学内の問題点に対する解決・改善策に関する企画提案書の作成（180～300分程度）
- 3)学内の問題点の解決・改善策に関するプレゼンテーションの準備（180～300分程度）
- 4)最終レポートの原案作成（120～180分程度）

注)作成や準備などに相当程度の時間が必要になる。上記の学習時間はこれまでの実績から算出した目安である。

成績評価基準および方法

以下の成績評価項目について、示された基準に従い成績評価を行う。

- 1.リアクションシート(2%×15)
- 2.事前アンケート・事後アンケート(5%×2)：「アンケート」と称しているが、講義の初回および最終回に実施する複数項目のチェックポイントからなる学習成果の自己評価で、これを記入・提出することで、(ア)、(イ)、(ウ)に関する受講者の達成度を評価する。
- 3.学内の課題に関し、企画提案書の提出(15%)、関係部署へのヒアリング報告書(10%)、プレゼンテーション(10%)
- 4.関係部署の職員によるプレゼンテーションの評価結果(15%)：関係部署から参加して下さる職員の方々によるプレゼンテーションに対する評価として、「課題の設定の適切さ」、「解決策としての適切さ」、「表現の適切さ」、「チームとしての活動」、「全体的な内容」の観点で評価する。講義担当者も同じシートを使って同時に評価を行う。
- 5.自分の今後の大学での学びについてのレポート（10%）：この講義を通して、社会を知り、社会で必要とされる力を知った結果、今後の大学でどのように学ぶかについて、レポートを作成・提出する。レポートの内容に基づき(ウ)について評価する。

注1)遅刻・欠席をすることおよび課された提出物を提出しないことは、減点の対象となる場合がある。

注2)この科目は定期試験を行わないため、再試験の対象とならないので、注意すること。

テキスト

テキストは特に定めず、講義中に必要な資料を配布する。

履修上の留意点

この科目はグループで学習活動を行うため、遅刻はもちろん、体調不良や忌引き以外での欠席は厳禁である。これは他のグループのメンバーに迷惑をかけるだけでなく、協力して下さる学内の職員の方々に対して失礼な行為であるとともに、ご迷惑をおかけすることになるからである。

また、プレゼンテーションの準備など、講義時間以外にもグループで作業をすることが必要な場合もあるので、スケジュール調整して時間を確保できるようにしておくことが求められる。

授業計画

- 第1回：オリエンテーション・アイスブレイク・自己紹介プレゼンテーションを行う。
- 第2回：グループワークの方法：「話の聴き方」、「質問のし方」、「メモのとり方」などについて理解する。
- 第3回：プレゼンテーションの方法について理解する。学内に存在する問題点・解決すべき課題を個人ベースで考え、課題解決のための企画提案書を作成する。
- 第4回：企画提案書を基に、個人で発見した問題点・解決すべき課題を、グループ内でプレゼンテーションして共有するとともに、互いに質疑しあう。
- 第5回：企画提案書をブラッシュアップし、担当教員にプレゼンテーションを行い、改善点の指摘を受ける。
- 第6回：グループを再編し、調査のし方について理解する。グループテーマごとに役割分担や学内の担当部署へのヒアリングの方針を定める。
- 第7回：ヒアリングの準備を行う
- 第8回：ヒアリングによる調査結果に基づき、グループで議論する。
- 第9回：プレゼンテーションの準備を行う。
- 第10回：プレゼンテーションの練習を行い、その模様をビデオで撮影する。
- 第11回：前回行ったプレゼンテーションの練習のビデオを視聴することにより、改善を要する点を摘出・確認し、プレゼンテーション資料を修正する。
- 第12回：プレゼンテーションのために使用するポスターを作成する。
- 第13回：グループテーマに該当する学内部署の担当者に対して、グループ全員でプレゼンテーションし、解決すべき課題の提示と問題点の解決・改善策を提案する。
- 第14回：前回のプレゼンテーションの結果、高評価のグループがプレゼンテーションを行う。これを基に、自グループの取り組み方について、ふりかえりを行う。
- 第15回：最終レポートの作成および学習成果の自己評価である事後アンケートへの回答を行う。

全15回を寺田、須長、廣嶋、紺田の4名で担当

URL

情報基盤センターMoodleシステム
[\(https://moodle.cis.fukuoka-u.ac.jp/\)](https://moodle.cis.fukuoka-u.ac.jp/)

重松 幹二、(工)、高山峯夫(工)、松井涉(日本気象協会)、井口順次(福岡市消防局)、佐藤研一(工)、橋津千穂(福岡市防災危機管理課)、矢守克也(京都大学防災研究所)、高橋淳夫(読売新聞社)、伊藤豪(商)、柴田久(工)、岩永和代(医)

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：後期：水・5時限 試験時間割：2021/01/21 5時限

- - - 概要 - - -

平成7年の阪神・淡路大震災、平成23年の東日本大震災、平成28年の熊本地震と、甚大な災害が国内で発生した。一方福岡では、平成11年および15年には御笠川氾濫における博多駅周辺の水害、平成17年には福岡県西方沖地震が発生し、安全とされていた福岡市内でも日頃から災害に対して高い注意意識が必要であることが明らかとなった。また、将来関東・東海・関西などに就職する学生にとっても、大学で防災・減災に関する知識を身に付けておくことは極めて重要である。

この講義では、防災に関する基礎知識を学ぶことにより、災害から自分や家族を守る術、被害を最小にする準備と対応方法を修得する。特に、

- ・自助（自分や家族の命はまず自分たちで守らなければならない）
- ・共助（被災した近所の人を助けることの重要性）
- ・公助（公的機関による救援行動の大災害時における脆弱さ）

の考え方を柱とし、各トピックスを理解することで、一生涯役に立つ教養を身に付けることができる。

講義は各学部の教員および福岡市役所・消防局・各種報道機関を講師としたオムニバス形式で進められ、文系理系両側面から防災に関する知識を広く得ることに特徴がある。特に、井口順次は福岡市消防局の消防吏員としての災害現場での豊富な経験を生かし、災害に対する準備と対応、救助活動、地域防災に関する講義を行う。また松井涉は気象予報士であるとともにNHKの気象ニュースキャスターを担当しており、気象予報の仕組みや自然災害全般に関する講義を行う。高橋淳夫は読売新聞社の記者として東日本大震災や原発事故の取材経験があり、報道機関の取材行動や記事のまとめ方、取材を通して得られた災害周辺状況について講義する。橋津千穂は福岡市城南区役所および福岡市市民局防災危機管理課として豊富な経験を持ち、災害に対する行政機関の考え方や市民への期待を講義する。

なお、この科目は「福岡大学防災士養成研修プログラム」の指定科目となっており、他の指定科目も受講することで、日本防災士機構が認定する「防災士」の受験資格を得ることができる。詳細は工学部事務室あるいはエクステンションセンターに問い合わせること。以下のホームページにも関連資料を掲載している。

<http://www.cis.fukuoka-u.ac.jp/shigem/>

- - - 到達目標 - - -

自然災害の発生メカニズムと想定される被害、災害情報の収集・発信・受信の重要性とその問題点を理解し、防災や減災に対する正しい対応策を考えることができる。(知識・理解)

「自助・共助・公助」の意味と問題点を理解し、その問題を解決するために必要な準備をすることができる。(技能)

防災が闘う最大の敵である「正常化の偏見（正常性バイアス）」の意味を知り、それを避けるためには防災に対する総合的な知識と想像力が必要であることを知る。(知識・理解)

自分や家族のみならず、社会全体の安全に対する高い倫理観を持ち、行動に移すことができる。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

毎回、次の授業のために必要な予習内容を指示するので、30分程度の予習の時間を要する。また、授業終了後に毎回小テストを行うとともに、解答締切後に正答をFUポータルを利用して配布するので、30分程度の復習を行うこと。

そのほか、学習期間中は災害に関する新聞記事やニュースに注意を払うとともに、背後でどのような出来事が発生しているか、どのように対応すべきかなどを想像しながら学習を進めて欲しい。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

講義終了後、毎回FUポータルを利用した選択問題あるいは記述問題による小テストを実施する。その日の個別の授業内容が理解できたかを評価の基準とする。単に出席しただけでは評価しない。

定期試験では、災害から自分を守る、災害の状況を知る、地域を守る、災害と社会システム、いのちを守る、の各項目の知識およびそれらを統合した知識が得られたかを評価の基準とする。

定期試験(70%)と毎回行う小テスト(30%)を総合して最終成績とする。

- - - テキスト - - -

プリントを配布する。

- - - 履修上の留意点 - - -

緊急時には対策本部や災害現場に出動しなければならない講師が多いため、急な休講や講義順が変更となる場合がある。休講となった場合は補講を行うので、掲示板に注意すること。

- - - 授業計画 - - -

1. [防災意識の必要性] 防災意識の必要性、自助・共助・公助(重松)
2. [災害から自分を守る] 過去の大震災や風水害からの教訓(高山)
3. [災害の状況を知る] 気象予報、警報・注意報(松井)
4. [災害から自分を守る] ライフラインの被害想定と断絶時対応(佐藤)
5. [災害の状況を知る] 最近の自然災害(福岡県西方沖地震、御笠川)(松井)
6. [災害から自分を守る] 個人の平常時の準備と災害時対応(井口)
7. [地域を守る] 地域の防災活動、自主防災組織、消防団活動(井口)
8. [地域を守る] 防災関係機関の対応(橋津)
9. [いのちを守る] 災害心理、被災者の行動意識(矢守)
10. [災害の状況を知る] 災害に対する報道機関の取り組み(高橋)
11. [災害と社会システム] 災害と損害保険(伊藤)
12. [災害と社会システム] 都市災害、防災計画・技術、災害とインフラ・デザイン(柴田)
13. [災害と社会システム] 被災社会の多様性(高橋)
14. [いのちを守る] 災害医療、トリアージ、高齢者・乳幼児対応(岩永)
15. [防災活動の必要性] 防災活動の必要性、私達にできること(重松)

山崎 好裕、中村 亮介・眞 守正

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：無し 科目水準：入門 試験実施：有り
授業時間割：後期：火・4時限 試験時間割：2021/01/21 5時限

- - - 概要 - - -

私は就職超氷河期と呼ばれた時代、総合系列科目として「現代を生きる：キャリアプランニング」という科目を開講していました。何年にも渡り多くの学生が参加し、いかにしてよい就職をするかを学生たちとともに考えたものです。

時代は変わり、今年度の就職状況はバブル時代を彷彿とさせる売り手市場です。しかし、政府の働き方改革、学生のブラック企業恐怖症など、仕事や就職を巡る環境や意識の変化は実に劇的なものがあります。そんな現代であるからこそ、働くとは何か、日本人の働き方はこれからどう変わっていくのかを、私たちは考える必要があります。

講義は、経済学の観点から仕事や人生について考え、制度・法律上の知識を身に付けてもらう前半部と、現代における働き方をテーマにしたグループワークを行う後半部とに分かれます。

- - - 到達目標 - - -

現代における労働をめぐる法律・制度について十分な知識と理解がある。(知識・理解)

よい就職をし、幸せな職業人生をおくることができる実践的スキルが習得できている。(技能)

ビジネス社会のなかで自分の幸福と社会の利益のために行動ができる倫理性を身に付けている。(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

山崎の担当する前半部の授業では、事前に講義タイトルを見て思いを巡らせてきてください(20分)。事後には講義のノートを見ながら復習をしてください(20分)。

眞の担当する後半部の授業ではグループワークを行いますので、事前にその日の作業の準備をし、事後にその日の作業のまとめをしておいてください(60分)。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

定期試験の評価は60%です。テストは前半部の講義で得た知識を問うもので、文章の穴埋め問題が6問30点分、×式問題が8問40点分、表の数字の穴埋め問題が6問30点分です。

グループワークの評価は40%です。作成した事業計画の評価を授業担当者がグループごとに出した上で、グループワークへの個人の貢献度をグループリーダーが評価した割合で補正し、最終的な個人の評価を出します。グループごとにMoodleのコースを作り、担当者がそこに参加して、授業時間外にもグループワークを進めますが、そこでの貢献度なども当然評価の対象となります。

- - - テキスト - - -

指定しません。

- - - 参考書 - - -

山崎好裕『キャリア・プランニング：あなたの未来を拓く「しごと学」講義』（中央経済社）ISBN 9784502386800
他は授業中に指示します。

- - - 履修上の留意点 - - -

前提になる知識は必要としないので、学部を問わず受講できます。幸せな人生のために受講をお勧めします。

- - - 授業計画 - - -

1. 日本の人口動態と労働供給（山崎）
2. 日本の経済動向と労働需要（山崎）
3. 人的資本とは何か？（山崎）
4. 情報の不完全さと労働市場（中村）
5. 賃金・昇進・働き方（山崎）
6. 労働移動と就業機会（山崎）
7. 所得分配と格差（山崎）
8. 日本の雇用と労働の未来（山崎）
9. グループ分け（眞）
10. 議論と課題設定（眞）
11. 課題解決のための役割分担（眞）
12. 課題解決のための調査（眞）
13. 報告書の作成（眞）
14. 報告書の完成（眞）
15. 評価と発表（眞）

寺田 貢、須長 一幸、廣嶋 道子、紺田 広明

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義及び演習 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：無し
 授業時間割：後期：月・5 時限 試験時間割：定期試験なし

概要

この科目では、従来型の講義形式ではなく、体験型学習（PBL：ProjectBased Learning）を通して、自分で考え自分で行動するという「主体性」を自覚しながら、社会人としての活動を体験することを目的としている。

はじめに、日常の多くの時間を過ごすキャンパスを内に存在する問題点を個人またはグループで発見する。その問題点の解決・改善策を模索することから福岡大学が現在直面している課題の解決に挑戦する。

これに加え、この科目の趣旨に賛同してくださった地域に根差した学外の組織（金融系企業）から参加して下さる講師（ゲスト講師）から提起される、実際の業務で生じるような課題の解決を模索する。個人またはグループで切り出した問題（グループテーマ）について、グループでの調査やディスカッションを重ね、まとめ上げた提案を該当する部署の担当者にプレゼンテーションし、それに対する評価を受ける。これは、学内の担当者または学外の組織からの講師と受講者が、上司と部下の関係となるロールプレイ学習に対応する。

さらに、グループで活動することから、メンバー各人の個性を意識し、他者の考え方が多様であることを理解し、そのような多様性をもつメンバーとともに協働することを体験し、「多様性」の意味を理解し、「協働性」を身に付ける。

講義時間のほとんどを使って、グループテーマに対する解決・改善策や企画案を作成し、プレゼンテーションを行うことで、「正解のない課題」を解決しようとするプロセスと失敗を経験することから、社会で必要な力と現時点での自分の力とのギャップを自覚し、大学で学ぶ意義を再確認する。これに加え、自ら考え、自ら学ぶことの重要性を認識し、今後の大学生活を送る目的を明確にする。

上記の通り、この科目では実社会からゲスト講師を招へいし、課題の出題と評価をお願いしている。これに加え、講義担当者の寺田は、複数の企業において各種の装置開発に従事し、企業における実務的な経験を持ち、講義担当者の廣嶋は、民間において組織マネジメント業務に従事し管理者としての経験を持ち、これらの実務経験に基づいた知見により構成した実社会で求められる能力の養成に向けた内容の講義を実施する。

到達目標

(ア) 社会に触れ、社会の実際の特徴や課題が何か説明できる(知識・理解)

(イ) 社会の課題を解決する上で必要な力を知り、それらを実際に活用することができる(技能)

(ウ) 大学生活を送る上で必要な取り組みについて説明できる(態度・志向性)

授業時間外の学習(予習・復習)

授業の進行に伴い、以下の事項について、事前・事後の学習が必要である。

- 1) 学習前の自己評価である事前アンケートへの回答（60～90分程度）
- 2) 学内の問題点に対する解決・改善策に関する企画提案書の作成（180～300分程度）
- 3) 学内の問題点の解決・改善策に関するプレゼンテーションの準備（180～300分程度）
- 4) ゲスト講師から提起された課題に関するプレゼンテーションの準備（180～300分程度）
- 5) 最終レポートの作成（120～180分程度）
- 6) 学習成果の自己評価である事後アンケートへの回答（60～90分程度）

注) 作成や準備などに相当程度の時間が必要になる。上記の学習時間はこれまでの実績から算出した目安である。

成績評価基準および方法

以下の成績評価項目について、示された基準に従い成績評価を行う。

1. リアクションシート(2% x 15)
2. 事前アンケート・事後アンケート(5% x 2)：「アンケート」と称しているが、講義の初回および最終回に実施する複数項目のチェックポイントからなる学習成果の自己評価で、これを記入・提出することで、(ア)、(イ)、(ウ)に関する受講者の達成度を評価する。
3. 学内の課題に関し、企画提案書の提出(5%)、関係部署へのヒアリング(5%)、プレゼンテーション(5%)
4. 関係部署の職員によるプレゼンテーションの評価結果(10%)：関係部署から参加して下さる職員の方々によるプレゼンテーションに対する評価として、「課題の設定の適切さ」、「解決策としての適切さ」、「表現の適切さ」、「チームとしての活動」、「全体的な内容」の観点で評価する。講義担当者も同じシートを使って同時に評価を行う。
5. 学外から提起された課題に関し、企画提案書の提出(5%)、プレゼンテーションのポスター作成(5%)、プレゼンテーション(10%)
6. ゲスト講師によるプレゼンテーション評価結果(10%)：ゲスト講師によるプレゼンテーションに対する評価として、「課題の設定の適切さ」、「解決策としての適切さ」、「表現の適切さ」、「チームとしての活動」、「全体的な内容」の観点で評価する。講義担当者も同じシートを使って同時に評価を行う。
7. 自分の今後の大学での学びについてのレポート(5%)：この講義を通して、社会を知り、社会で必要とされる力を知った結果、今後の大学でどのように学ぶかについて、レポートを作成・提出する。レポートの内容に基づき(ウ)について評価する。

注1) 遅刻・欠席をすることおよび課された提出物を提出しないことは、減点の対象となる場合がある。

注2) この科目は定期試験を行わないため、再試験の対象とならないので、注意すること。

テキスト

テキストは特に定めず、講義中に必要な資料を配布する。

履修上の留意点

この科目はグループで学習活動を行うため、遅刻はもちろん、体調不良や忌引き以外での欠席は厳禁である。これは他のグループのメンバーに迷惑をかけるだけでなく、協力して下さるゲスト講師の方に対して失礼な行為であるとともに、ご迷惑をおかけすることになるからである。

また、プレゼンテーションの準備など、講義時間以外にもグループで作業をすることが必要な場合もあるので、スケジュール調整して時間を確保できるようにしておくことが求められる。

授業計画

第1回：オリエンテーション・アイスブレイク・自己紹介プレゼンテーションを行う。

第2回：グループワークの方法：「話の聴き方」、「質問のし方」、「メモのとり方」などについて理解する。

第3回：プレゼンテーションの方法について理解する。学内に存在する問題点・解決すべき課題を個人ベースで考え、課題解決のための企画提案書を作成する。

第4回：企画提案書を基に、個人で発見した問題点・解決すべき課題を、グループ内でプレゼンテーションして共有するとともに、互いに質疑しあう。

第5回：企画提案書をブラッシュアップし、担当教員にプレゼンテーションを行い、改善点の指摘を受ける。

第6回：グループを再編し、調査のし方について理解する。グループテーマごとに役割分担や学内の担当部署へのヒアリングの方針を定める。

第7回：調査結果に基づき、グループで議論し、プレゼンテーションの準備を行う。

第8回：プレゼンテーションの練習を行い、その模様をビデオで撮影する。

第9回：前回は行ったプレゼンテーションの練習のビデオを視聴することにより、改善を要する点を摘出・確認し、プレゼンテーション資料を修正する。

第10回：プレゼンテーションのために使用するポスターを作成する。

第11回：グループテーマに該当する学内部署の担当者に対して、グループ全員でプレゼンテーションし、解決すべき課題の提示と問題点の解決・改善策を提案する。

第12回：前回のプレゼンテーションの結果、高評価のグループがプレゼンテーションを行う。これを基に、自グループの取り組み方について、ふりかえりを行う。ゲスト講師から出題された課題解決のための企画提案書を作成する。

第13回：前回までに学んだことをまとめるとともに、ゲスト講師から出題された課題に対する企画提案書を基に、テーマ別にグループを再編する。

第14回：ポスター作成などプレゼンテーションの準備を行う。

第15回：ゲスト講師に、解決すべき課題の提示と問題点の解決・改善策をプレゼンテーションし、批評を受ける。

全15回を寺田、須長、廣嶋、紺田の4名で担当

URL

情報基盤センターMoodleシステム
<https://moodle.cis.fukuoka-u.ac.jp>

合力 知工

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義及び演習 実務経験：無し 科目水準：入門 試験実施：無し
 授業時間割：後期：木・4時限 試験時間割：定期試験なし

--- 概要 ---

本講義は、PBL（課題解決型）プログラムを通して、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を意識し、企業のビジネスを体験しながら、「学生自身が考える、社会に必要な能力」と「企業が求める、社会に必要な能力」とのギャップを学生が理解し、実際に「自らの強みとしての能力」を「社会で必要とされる能力」と結びつけ、企業の提示する課題を解決する提案ができるようになることを目的としています。

本講義の特徴は、企業がビジネスの中で抱える課題を学生に提示し、学生がその課題に対して深く取り組んでいくことで、表面的ではなく、本質的な課題解決を行い、自己理解・自己発見を促すことにあります。受講者は6～7名程度のメンバーで構成されるグループで調査や議論を重ね、課題解決策を提案しますが、社会と関連づけて自己理解・自己発見をするためには社会人の目も必要であり、数グループに1名ずつ企業の方に「メンター」として入ってもらっています。「学生が主体的に考えるメンターに相談するメンターからのフィードバックをもとに考え方の修正……最終的な提案」というプロセスを踏むことによって、社会人基礎力を学びながら、卒業後にビジネスシーンで必要とされる課題解決のプロセスを理解できるようになります。なお、中間発表と最終提案は、企業担当者の前で発表し、講評を頂きます。

本学は文系・理系の学生がワンキャンパスで学んでいるため、様々な考え方や価値観に触れ成長できる環境にあります。本講義はいくつかのグループに分かれて進めていきますので、多様な学部学科の学生が同じ教室で理論を学ぶだけでなく、互いに意見交換をしながら、時にはフィールドワークを行い、主体的に考えて共に行動していきます。実社会で起きている課題に取り組むことで、問題を発見する力、それに対応し提案する力を学び、創造性（クリエイティビティ）を養うことも可能です。

また、本講義は教職協働で運営し、就職・進路支援センター職員もアドバイザーとして毎回の講義に参画します。通常業務で培った、自己分析や業界・企業分析の手法についてのアドバイスを受けられるということも本講義の特徴の一つです。

--- 到達目標 ---

企業の現状を理解できるようになる。(知識・理解)

企業のあるべき姿を踏まえて新たな提案ができるようになる。(技能)

現状とあるべき姿とを繋げる提案ができるようになる。(技能)

--- 授業時間外の学習(予習・復習) ---

< 予習 >

企業から提示された課題に対して魅力ある提案をするには、授業時間だけでは足りないので、授業時間以外にもグループで集まって議論をする必要があります。(2時間程度)

< 復習 >

担当教員や企業担当者、就職・進路支援センター職員からのフィードバックをもとに、自分たちの提案を修正する。(60分程度)

--- 成績評価基準および方法 ---

以下の成績評価基準に従い、総合的に評価する。
 個人レポートの提出状況と記入内容(10%)
 講義時間終了時に記入・提出し、毎回の学習状況を確認するとともに社会人基礎力について発揮状況を評価する。

各回の個人レポートでの課題に対する取り組み(10%)
 各回の個人レポートで課題としたことを、次回の講義で取り組んでいるかを判断するとともに、社会人基礎力について発揮状況を評価する。

企業への中間発表・最終発表の進捗報告書(10%×2)
 第9回と第14回の企業への提案の際の進捗状況を記入・提出し、内容から「計画性」や計画実行に向けて必要な「状況把握能力・グループワークメンバーとの協働・講師(企業担当者・教員・就職・進路支援センター職員)との連携」の修得状況を評価する。

中間発表・最終発表におけるプレゼンテーション(10%×2)
 第9回と第14回に企業担当者に対してプレゼンテーションを行い、社会人基礎力の中でも特に「考え抜く力」と「チームで働く力」の修得状況を評価する。

企業評価シート(10%)
 企業担当者の講評として、「課題解決へのプロセスの納得性」と「プレゼンテーションスキル」、「グループ活動評価」、「実ビジネスとしての実現性」の観点で評価する。

グループ振り返りシート(10%)
 第14回の最終発表後にグループの活動についてグループメンバーで討論し、結果を記入・提出する。グループ活動における成功点や失敗点を洗い出し、改善計画を策定できているかを評価する。

個人振り返りシート(10%)
 第14回の最終発表後にグループの活動を個人で振り返り、現状を認識し今できていることとできていないことを明確にし、今後の課題設定ができているかを評価する。「明日からの自分」と題した、自分の今後の大学での学びについてのレポート(10%)

第15回に、この講義を通じて実社会でのビジネスに触れ、そこで必要とされる能力を知ったことで、今後の大学生活でどのように学び、そのことからどのような能力を身につけていくのか、また、グループ活動を通じてどのような自己を認識し、今後の大学生活でどのように自己研鑽を積んでいくのかをレポートにまとめ提出する。

--- テキスト ---

特に無し

--- 履修上の留意点 ---

PBL（課題解決型）プログラムに関心があり、真剣に取り組みたいという人だけが履修するようお願いいたします。グループでの活動になりますので、モチベーションに温度差が生じると活動に支障が出てしまいます。真面目に取り組んだ履修者には大きな成果が期待できますが、その分、非常に厳しい内容ですので、「何となく」という軽い気持ちで履修しないように注意してください。

--- 授業計画 ---

- 第1回 本講義の概要と社会人基礎力の理解（高野、合力、森田）
 第2回 チームビルディング（森田）
 第3回 チームのウォームアップ（森田）
 第4回 企業担当者からの説明、課題の提示（森田、山際）
 第5回 グループワーク、プレゼン、改善（森田、山際）
 第6回 グループワーク、プレゼン、改善（森田）
 第7回 グループワーク、プレゼン、改善（森田）
 第8回 中間発表（合力、森田、山際）
 第9回 グループワーク、プレゼン、改善（森田、山際）
 第10回 フィードバックを受けてのグループワーク、プレゼン、改善（森田）
 第11回 フィードバックを受けてのグループワーク、プレゼン、改善（森田）
 第12回 フィードバックを受けてのグループワーク、プレゼン、改善（森田）
 第13回 最終発表（合力、森田、山際）
 第14回 本講義の振り返り（合力、森田、山際）
 第15回 講演会（連携企業 代表取締役社長）

鶴田 直之、(川上 哲志(九州大学)、最首 英裕(株式会社グルーヴノーツ)、島田 敬士(九州大学)、高橋 淳夫(読売新聞社)、峰松 翼(九州大学)、柳瀬 隆志(嘉穂無線ホールディングス株式会社)、吉野 嘉高(筑紫学園大学))
 期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義及び演習 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：無し
 授業時間割：後期：木・5 時限 試験時間割：定期試験なし

- - - 概要 - - -

ビッグデータ、データサイエンス、AI(Artificial Intelligence: 人工知能)、IoT(Internet of Things)といった情報通信技術 (ICT: Information & Communication Technology) に牽引された超スマート社会のことをSociety5.0と呼ぶ。この社会では、多くの定型業務が自動化されるため、これまでとは社会で求められる人材像が大きく変化する。本科目の受講生は、第一に情報処理技術研究者からAIおよびICTの正しい理解と使い方の基礎を学び、第二に高度なICT活用を事業としている企業からICTの現代社会における役割や活用範囲の広さ、ICT開発に携わる人材に求められる能力について学ぶ。第三には、ビジネスにおいてAIやICTを積極的に利用している企業から活用事例や効果、課題、ICTを利用する人材に求められる能力について学ぶ。最後に、マスコミの実務経験者からSNSやGAFAの台頭が社会に及ぼしている影響、市民に求められる情報活用能力とその課題について学ぶ。本科目は、これら4つの学びを通じて、Society5.0の動向を正しく理解すると同時に、将来に向けて自身の伸ばすべき能力について考え、主体的で継続的な学びの目標設定ができるようになることを目的とする。

- - - 到達目標 - - -

Society5.0を理解する(知識・理解)

Society5.0を生き抜くためのICTスキルの基礎を身につける(技能)

Society5.0で求められる人材像について考え、学習意欲を高める(態度・志向性)

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

「授業計画」の「到達目標への関与度」を参考にすること。
 Aに関与する回：授業の復習により知識の定着を図ると同時に、ワークシートやレポートを完成させる (の回は60分、○の回は45分)
 Bに関与する回：授業で行った演習を自身で発展させ、自主学習によりスキル向上を目指す (の回は60分、○の回は45分)
 Cに関与する回：グループワーク等で意見交換ができるように事前に授業内容の予習を行い、自身の考えをまとめておく (45分)

- - - 成績評価基準および方法 - - -

知識・理解 (A) : Society5.0を理解する (40%) : 各回の授業担当者が課すミニレポートやミニテストにより知識の定着度、理解度を評価する
 技能 (B) : Society5.0を生き抜くICTスキルの基礎を身につける(30%) : 技能演習による課題の完成度、およびICTを活用したレポート提出やスケジュール管理の利用状況の評価する
 態度・志向性 (C) : Society5.0で求められる人材像について考え、学習意欲を高める(30%) : 未来新聞作成のための準備、作成活動への積極性、最終レポートにより、将来に向けた自身の目標設定を自分の言葉で表現できることを評価する

- - - テキスト - - -

使用しない。随時、必要な情報はmoodleおよびFU_Box、Office365で配信する。

- - - 履修上の留意点 - - -

自身のノートPCやタブレット端末を所有しているものは、授業に持参し、積極的に活用することが望まれる。

- - - 授業計画 - - -

回概要到達目標への関与度

ABC

01イントロダクション (Society5.0とは) (全員)

02自己管理および授業管理ツールとしてのOffice365とFU_Boxの機能を理解し利用法を習得する(川上、峰松)○○

03AIプログラミングの基礎的環境の利用法を習得する(川上、峰松)

04AIの応用分野の概説を聞いて理解し、ごく簡単なプログラムを動かしながら仕組みを知る(島田、川上、峰松)○○

05○○

06○○

07AIや高度なICTを活用して事業を展開しているIT企業の具体的な業務内容を理解し、今後の動向や課題について考える(最首)

08○○

09ビジネスにおけるAIやICTの活用事例を知り、効果や課題、求められる人材像について考える(柳瀬)

10○○

11SNSやGAFAの台頭が、ニュースの判断基準やジャーナリズムの規範に影響し、世論形成のメカニズムを変えていることを知り、市民に求められる情報の活用方法について考える(吉野(11,12回)、高橋(12回))

12○○

13未来新聞の作成：12回目までにまだんだことを踏まえ、10年後を予測して新聞記事をグループワーク形式で作成する(鶴田、高橋)○○

14○○

15発表会：ポスター形式で未来新聞の品評会を行う(全員)○○

- - - URL - - -

Moodleシステムサービス
 (https://moodle.cis.fukuoka-u.ac.jp/)

宗正 みゆき、波平恵美子、浦綾子、林誓雄、岩永和代、稲光哲明、吉川千鶴子、平野頼子、橋下京子、馬場みちえ、本庄考
 期別：前期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：前期：火・2時限 試験時間割：2020/07/29 5時限

- - - 概要 - - -

生命倫理（Bioethics）について、主に医療や医療技術との関連において論じる。すなわち、医療や医療技術の発達に伴って変化している死の定義や生命の捉え方等について、多様な側面から講義し、生命に係る技術の進展が人間の幸福と社会にどのような影響をもたらし、それによってどのような課題が派生しているのかについて講義する。具体的には、仏教やキリスト教等の宗教における死生観や自死の捉え方について学ぶことを通して、また当事者の体験を学ぶことを通して、さらに様々な医療やケア場面における実践（ターミナルケア、緩和ケア、在宅で死ぬことに関する支援、不妊治療、臓器移植コ ディネート、食や安全、自殺等）を学ぶことを通して、学生が社会との繋がりの中で生命倫理について考える機会とする。

尚、本講義の講師は、様々な実務経験者（文化人類学・哲学・医学・看護学の研究者、医療・看護の実践者）、移植を受けた経験を持つ当事者等で構成する。

- - - 到達目標 - - -

生命倫理とは何かを多様な側面から理解し、医療や医療技術の発達に伴い変化していく死の定義や生命の捉え方について、説明できる。（知識・理解）

- - - 授業時間外の学習(予習・復習) - - -

社会とのつながりの中で学び、学生自身の生命倫理観構築を目指す科目なので、常に進歩する医療技術、多様な「生命（いのち）」や生命倫理についての考え方に興味を持ち、新聞等メディアの報道や書籍等の関連情報を得て、自分なりに考えておくようにする（講義1回あたり60分程度）。

- - - 成績評価基準および方法 - - -

・生命に係る倫理的問題にどのようなものがあるかを知り、自らの考えを記述することができているかを基準として評価する。
 ・講義を通して生命倫理について関心を持ち、特に深めて考察した倫理的な問題について記述し、説明できているかを基準として評価する。
 上記を定期試験(80%)と授業参加態度等平常点(20%)を目安として、総合的に評価する。

- - - テキスト - - -

指定しない

- - - 授業計画 - - -

- 1.オリエンテーション（宗正みゆき）
現代医療と生命倫理（波平恵美子）
- 2.「いのち」観の変化と医療（波平恵美子）
- 3.生きる権利を持つ人格の範囲～人工妊娠中絶を手がかりに～（林誓雄）
- 4.ターミナルケアと生命倫理（安楽死の課題を含む）（浦綾子）
- 5.安全と看護倫理（身体抑制の課題を含む）（岩永和代）
- 6.がんによる死に直面した人になにをしてあげられるか？～緩和ケア病棟の一日～（稲光哲明）
- 7.食と看護倫理（経管栄養の課題を含む）（吉川千鶴子）
- 8.看護と倫理（宗正みゆき）
- 9.在宅での看取り～家で、最後まで自分らしく生きたい～（平野頼子）
- 10.臓器移植と生命倫理（脳死を含む）（浦綾子）
- 11.臓器移植と生命倫理～神様がくれた贈物～（海外で臓器移植を受けた患者としての経験）（橋下京子）
- 12.医療現場での医療倫理と自己決定権～モヤモヤ感とスカット感～（稲光哲明）
- 13.自殺と生命倫理（馬場みちえ）
- 14.生殖医療の現状と問題（本庄考）
- 15.まとめ（宗正みゆき）

奥野 充

期別：後期 単位数：2 開講年次：1 授業形態：講義 実務経験：有り 科目水準：入門 試験実施：有り
 授業時間割：後期：月・5 時限 試験時間割：2021/01/14 3 時限

概要

火山の噴火現象は、噴出物と火山地形として記録される。火山の活動に伴って温泉や地熱現象も認められ、その景観と相まって人々に多様な恩恵を与えている。一方で、火山がひとたび噴火すれば、大量の土砂や熱のため周囲に甚大な被害を与える。現在、発展しつつある情報通信技術（ICT）を踏まえ、本学でも平成24年度から国際火山噴火史情報研究所が設置され（平成28年度廃止）、火山噴火史に関するデータベース構築と情報発信が進められている。

この講義では、火山の噴火現象から始まり、火山の様々な恩恵や災害を理解すると共に、それらの調査研究をどのようにデータベースとして体系化すべきか、複眼的な視点から議論していく。これらを総合的に研究する学問が「火山噴火史情報学」である。社会との関わりとしては、生活に欠かせないICTの正しい理解、噴火史情報学を通じた防災・減災への活用、さらに観光ツアーやジオパークなど多岐にわたる。

特に実務経験をもつ福島（NPO法人桜島ミュージアム）や、西園（株式会社西日本技術開発）からは、防災・減災やジオパークを含む観光ツアーに関する現在の状況や問題点を詳しく知ることができる。

具体的には「火山噴火史情報学とは」で、この講義の概要と学問分野の体系について理解する。「火山地質学」と「火山地形学」では、火山の噴火現象とその結果生ずる堆積物および地形について知る。「地熱と温泉の地質学」では、火山周辺の地熱現象や温泉の成因について知る。「高度化情報社会における知の体系化の仕組み」では、インターネット上での情報共有の仕組みや知識の再整理について知る。「情報通信技術を用いた火山噴火史情報の体系化と活用」では、体系化された噴火史情報の活用方法とその将来展望について知る。さらに、「噴火史データベースに関する実践的解説」では火山噴火のデータベースの利用法を実践的に知る。「地質情報のデータベース（1）と（2）」では、地質情報に関する研究者向けのデータベースと一般向けのデータベースについて知る。「火山噴火と気候・植生への影響」では、火山周辺の植生、特に噴火によるインパクトを知り、火山噴火が気候に及ぼす影響を理解する。「地質情報と博物館」では、博物館における火山を含む地質情報の収集・活用を、「火山とジオパーク」では、ジオパーク、特に桜島火山を中心に桜島・錦江湾ジオパークについて詳しく知る。「火山噴火と防災（1）と（2）」では、火山防災の現状を噴火現象と関連づけて理解し、低頻度大規模噴火現象の社会的対応の可能性について考察する。そして、「まとめ」として、この講義の総括を行う。

到達目標

理学的な火山地質学・火山地形学の調査研究、工学的な情報科学・防災工学を一連のものとして具体的かつ系統的に理解している。（知識・理解）

噴火史情報に関する科学と技術がどのように社会へ還元（あるいは貢献）できるかについて考える能力をもっている。（技能）

火山を中心とした自然現象を楽しみ、かつ災害に備える態度を身につける。（態度・志向性）

授業時間外の学習(予習・復習)

予習：事前に参考書などを用いて学習内容を調べてるなどして予習しておくこと。

復習：講義後は、ノートやプリントを整理して、次の講義に臨むこと。その際には、参考書の記述も参考にして、理解を深めること。目安時間は、予習と復習をあわせて180分である。

成績評価基準および方法

定期試験（100％）により評価する。その際、火山地質・地形、情報工学、防災に関する知識と幅広い理解を評価基準とする。

テキスト

講義時にプリントを配布する。

参考書

梅棹忠夫（編）（1983）博物館と情報．中公新書，259p．
 新井房夫（編）（1993）火山灰考古学．古今書院．264p．
 鎌田浩毅（2007）火山噴火 予知と減災を考える．岩波新書．228p．
 井田喜明・谷口宏充（編）（2009）火山爆発に迫る 噴火メカニズムの解明と火山災害の軽減．東京大学出版会，225p．
 遠藤邦彦・小林哲夫（2012）第四紀（フィールドジオロジ 9）．日本地質学会フィールドジオロジ 刊行委員会，共立出版，240p．
 土木学会地盤工学委員会火山工学小委員会（編）（2009）火山工学入門．土木学会．261p．

履修上の留意点

この講義は、オムニバス方式で行う。各回の担当者は、以下の授業計画に記載されている。このうち、福島と西園は、実務経験をもつ講師である。

授業計画

- 1．火山噴火史情報学とは（奥野）
- 2．火山地質学（奥野）
- 3．火山地形学（奥野）
- 4．地熱と温泉の地質学（田口）
- 5．高度化情報社会における知の体系化の仕組み（鶴田）
- 6．情報通信技術を用いた火山噴火史情報の体系化と活用（高橋）
- 7．噴火史データベースに関する実践的解説（奥村）
- 8．地質情報のデータベース（1）（鳥井）
- 9．地質情報のデータベース（2）（鳥井）
- 10．火山噴火の気候・植生への影響（藤木）
- 11．地質情報と博物館（鮎澤）
- 12．火山とジオパーク（福島）
- 13．火山噴火と防災（1）（西園）
- 14．火山噴火と防災（2）（西園）
- 15．まとめ（奥野）